

特別文化講演

一瞬の無限・そこから生まれる共振の世界
～ ヒマラヤ・日本の山々に触れる体験から ～

戸 高 雅 史*

I. ヒマラヤ・・・その宇宙的世界に魅了されて

ヒマラヤ。それは標高 8,848m の世界最高峰エベレスト(別名: チョモランマ)峰をはじめ、14 座の八千メートル峰すべてを含む世界の屋根ともいえる山脈の総称。氷河の奥に聳える山の世界は、雪と氷と岩、そして藍の空。八千メートルを超えると酸素の量は平地の三分の一以下になる、限りなく宇宙に近い世界です。私はそこに宇宙を感じ、23 歳から 16 年間にわたり、毎年のように登り続けてきました。

あの高みにゆけば、なにかがみえるかもしれない。ただシンプルに真理を希求する思いが山へ、ヒマラヤへと向かうエネルギーの源でした。

初めてのヒマラヤは 23 歳のとき。ネパールにあるアンナプルナ II 峰(7,937m)南壁の日本人初登頂を目指して 8 名の登山隊で向かいました。最年少の私は高度への順応も調子よく、先輩とふたりで隊の先導役となってルート作りを担っていました。6,000m 位の地点でテントの中で休んでいるとき、上部の方から「サーッ」という音がしました。「なんだろう?」と耳を澄まそうとした途端にテントごと何かに押しつぶされるように動きだしました。丁度出来上がりかけていた料理が足

にかかって「熱い!」と思うやいなや、「雪崩だ!」とパニックに。テントのなかはとんでもない状態になって流されてゆきます。幸い、僅かな距離で止まり、あわててテントから這い出すとすぐ下にはクレバス(氷河の裂け目)が口を広げていました。もう少し流されていたら本当に危ないところでした。この場所は決して安全ではないとはわかっていたのですが、一日登っても安全圏には着けず、翌日すみやかに上部へ移動しようと考えていたなかでの降雪による新雪雪崩でした。スケールの大きなヒマラヤならではのリスクといえるかもしれません。このときは、すぐに気持ちを切り替えることができました。「こんなことであきらめたら、ヒマラヤの頂には立てないんだ。」再び、隊の先陣として頂上アタックに備え 7,000m 付近の雪面を登っているとき、足を一歩踏み入れた瞬間に雪面に「ピシッ」と横一線に亀裂が入り、斜面全体が滑り出しました。あっという間に雪に巻き込まれてゆきます。粉雪を吸い込み、苦しくなってきました。今でしたら片手で気道を確保し、本流を避けるように動くのですがいかんせん、当時は未熟でした。雪は土砂のように重く、為すすべなく雪に巻かれて流されてゆきます。次第に意識が遠くなり、走馬灯のように 23 歳までの人生が浮かび、最後に両親が泣いているシーンが出て

きました。

「死んでたまるか！」

力を振り絞って大暴れ。その甲斐あってか、上半身が雪の上に出て止まりました。200m ほどは流されていたでしょうか。苦しさで正気に返りました。「僕は、生きている！」

気管の奥まで吸い込んでしまった雪を吐き出すのに必死でした。ようやく落ち着いてくると嗚咽とともに涙が溢れてとまりません。こんなに命を危険に晒して頂上を目指すことにいったい何の価値があるのだろうか。「もう、いい。もう、やめよう。」家族や友のいる日本に帰ろう。

帰国し、大学院の院室で机に向かう日々。高校の教師になり、生徒たちと楽しく山に登ることが新たな夢になっていました。半年ほど経った頃でしょうか。窓の外を眺めてはため息をつくことが多くなりました。

「あのヒマラヤでの日々、大変だったけれども僕は全力で生きていた。このまま諦めて悔いはないか？」

ヒマラヤが甘くないことは身をもって体験しました。それでも心の中に湧いてくる山への思い。

「これは確かめるしかない。」自分は高所登山の厳しい世界に通用する人間なのか否か。そのためには、「ひとりでゆくしかない。」

大学院を修了後、私は単独でアラスカのマッキンリー山(6,168m)へ向かいました。セスナでカヒルトナ氷河の 2,100m 地点に降り立ち、ひとりの登山が始まりました。しかし、「自分という人間を確かめる！」という強い思いを持ってアラスカに来たのに、実際に山のなかに入ると怖くなり、引き返す口実を探しながら歩いている自分がいました。四日目、テントの外は吹雪でした。「今日、ここで停滞(悪天候を行動せずにやり過ごすこと)したらもう、この登山は終わる。」と感じました。「それでいいのか？僕はそんなつもりでここに来たんじゃない。」意を決し、外に出てテントを撤収し、上部に向かって登り出しました。強風と雪。厳しい天候の中で懸命に登ってゆくうちに、

逃げ腰だった気持ちは消え、風向きの変化や雲の動き、気温の違いも感じ、気がつくとなにに居ながら、意識のバールで自分を囲っていたのかもしれない。悪天候のなかを夢中になって登るうちにそのバールは剥がれ、山と自分を隔てる境はなくなっていました。山に入って 19 日目、ついに私はマッキンリー山の山頂に到着。最後、30m ほど先に頂が見えると、まるで子どものように泣きじゃくりながら頂へ。「ああ、僕はやっぱりヒマラヤへゆきたい！」

以後、毎年のようにヒマラヤの高峰へ。

10 年ほど経ったとき、なにかヒマラヤの高所がとても身近な慣れ親しんだ世界のように感じました。「自分なりのスタイルと感性で八千メートル峰に登りたい！」それまでは他者の計画に参加する形で登ってきていました。私にとっての新たなステージとして目標にした山は、大きく広い山という意味のブロードピーク峰。名前の通り、北峰(7,490m)、中央峰(8,011m)、主峰(8,047m)の三つのピークがまるで鳥が翼を広げたように聳えています。仲間ふたりとこの三峰の縦走へ向かいました！急峻な雪壁を北峰に向かって一日半ほど登った時、この壁の下降に必要な装備などの関係から、もう引き返せないことに気づきました。中央峰を越え、主峰との鞍部まで行かなければ下降できるルートはありません。

つまりは「生きて帰るには、行くしかない」ということ。そのことに気づいた瞬間、未来も過去も意識の中から消えました。存在するのは目の前の「いま、この瞬間」のみ。刻々とその一瞬にすべてのエネルギーが注がれる感覚。ひとは何かに夢中になっているとき、おそらくそんな感覚になっているのですがこの登山では残りの五日半、ずっとその感覚が持続しました。進むルートを探す時も右か左か状況を見ていろいろと検討して最終的に判断を下すのですが、このときは迷いなく直感的に感じた方向に進んでゆきました(写真 1)。ヒマラヤの大陸的な気候でもそれほど好天は長くは続きません。しかし、ありがたいことに五日目

まで好天は持続し、天候が崩れる前に中央峰を越えることができました。主峰との鞍部に降り立ち、これで生きて還れると実感。翌日、嵐の中、主峰の頂を踏み一週間ぶりにベースキャンプに帰還。

「いのちは刻々といまにある」という感覚が、からだどころに深く刻まれる体験となりました。



写真1 雪と氷と藍の空。高みを目指して
ブロードピーク中央峰 7,800m にて。

この登山ではもうひとつ、印象に残る体験がありました。主峰への登頂を終え、ベースキャンプへと下降中、7600m 付近で先頭の私は雪面に足を踏み入れた瞬間、まさに足裏の感覚のままにジャンプ。飛んだ雪面には「バッ！」という音とともに不気味な穴が口をあけました。ヒドンクレバスです。丁度 1m から 2m 幅位のクレバスは雪で覆われやすく、まるで落とし穴のようになります。もし、「あっ、クレバスだ。飛ばなければ！」と状況を判断し、脳から身体へと指令を伝えて飛んでいたら間に合わなかったかもしれません。今振り返っても紙一重の場面だったと思うのですが、身体自体が持つ反応力が生きるために最高度に発揮された瞬間であり、いま、あらためて私たちの持つその力の大切さを思います。

翌年、36 歳になった私は日常のなかにおいても「ひとり」ということが大きなテーマになっていました。家族がいて仲間にくまれているとしても、ひとは突きつめてゆけばひとりではないか。それを私なりに体験を通してみつめてみたい。ブロードピーク峰縦走中にずっと背後に聳えていた山がありました。世界第二の高峰、K2 峰(8,611 m) (写真 2)。その孤高の山があたかも呼んでいるかのようなでした。

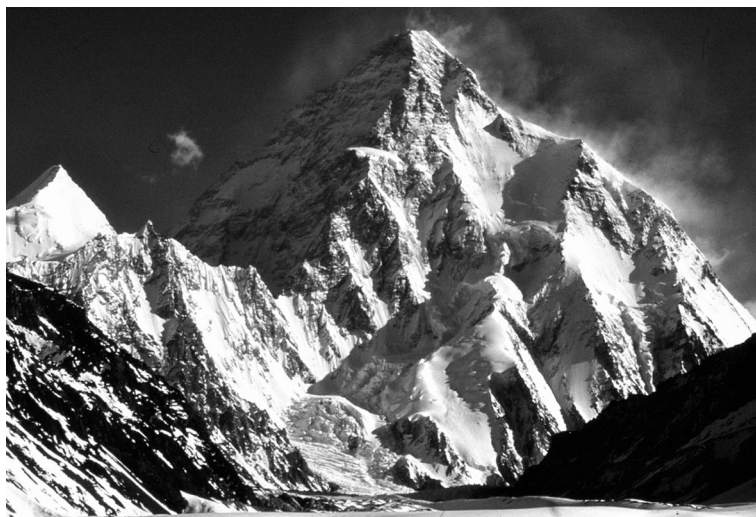


写真 2 K2 峰(8,611m)

1996年5月、私はK2峰への単独登山のため、日本を出発しました。

ヒマラヤの高峰へ登るには、気圧の関係で高度があがるにつれ酸素の量が少なくなってゆくために事前に高度順応を行う必要があります。酸素の量は標高5,000mで平地の半分、8,000mを超えると三分の一以下の世界に入ってゆきます。それゆえ、私たちが日本の山に普通に登山するように必要なものを持って登り、途中で泊まり、さらに登って登頂し、下山するという一般的な登り方ができません。無理をすると高山病という病気になってしまいます。頭痛、吐き気、倦怠感、さらに症状が重くなると肺水腫という症状になり、自力で下山できなくなります。しかし、私たちの体は素晴らしい能力を有していて、その酸素の希薄な空間に適応してゆくことができます。高所への順応力といいますが、それは生命として新たな環境に適応しようとする生命力ともいえるでしょうか。細胞レベルで働くこの反応は無理をするとダメージとなり高山病になってしまうため高度の適度な刺激が大切です。個人差もあるため、自分のからだの感覚に敏感になって順応行動を進めてゆきます。例えば標高5,000mのベースキャンプから6,000mまで登り、そこで泊まらないで降りてくることを何日か繰り返します。そしてある程度慣れてくると今度は6,000mにテントを張ってそこに泊まり、7,000mまでも何度か上り下りを繰り返す。そうした刺激にからだが反応し、短期間で酸素の希薄な空間に慣れてゆきます。この登山では約1ヵ月かけて7,000mまで3回登り、準備ができたと感じました。それはもちろん高所からだが順応するだけでなく、山と馴染むことも重要だと感じます。私はずっと、酸素ボンベを使用しない無酸素登山で登ってきたのでこの順応の期間がとても大切であり、また山頂に向かう前に何度も何度も上り下りを繰り返しながら山とふれあってゆくことをうれしく、かけがえのないものだと感じます。

順応を終え、天候が安定するのを待って、いよいよ山頂に向けてアタックに出発。登頂へのポイントは標高8,300m付近に立つ氷壁部分が技術的

に難しいのとそこを抜けてから地形的に雪が吹き溜まりやすく、深雪の斜面になっている部分。歩くだけでも精一杯の高度でラッセル(雪をかき分けて登ること)をして登れるか否か。

8,000mに設営したテントを夜半に出発。ありがたいことに無風快晴、そして満月です。実は二度ほど悪天候のため、アタックをやり直し、今回が三度目のアタックでようやく最高のチャンスに恵まれました。夜明け前、氷壁帯に到達し左から回り込みながら抜けました。そこから傾斜が急なこともあって胸ぐらいの深雪のラッセルになりました。両手で上部の雪を掻き、肘、膝で押し固め、そっと足を上げる。全身を使って流れるようにひとつひとつの動作を続けて高みを目指します。

「ああ、このために僕はK2峰に来たんだ！」8,400mを超える空間で静寂の時間が流れてゆきます。深い呼吸を通して大気中からエネルギーが流れ込んでくるようです。ついに深雪帯を抜け、パキスタンと中国の国境稜線に出ました。時計を見るとこの150mほどの深雪帯で4時間近くが過ぎていました。最後は一步一步、ここまでの道程を味わうように頂へ向かいました。

午後4時20分、最高点に到着(写真3)。もう、ここより高いところはありません。遥かにヒマラヤの山々が連なり、山と山の間は氷河で埋め尽くされています。ひとがながくはおれない高みですが、なぜかやわらかな世界に感じました。

「ひとりあること。それはすべてとひとつ。」
登頂のよろこびはもちろん、なによりもこのひと

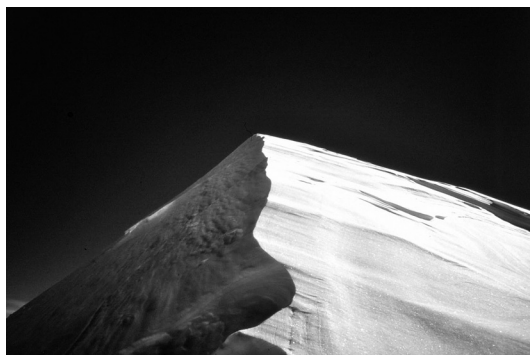


写真3 最高点へ K2峰にて

りの登山を通して得られた実感でした。

K2 峰に登り、やはり世界で一番高い山、エベレスト(チョモランマ)峰に行きたくなりました。私が特に惹かれていたのはネパールと中国(チベット)の境界に立つこの山のチベット側からの姿。チョモランマとはチベット語で大地の母を表します。標高 8,848m。この山の約 3,000m の北西壁を山頂に向かって真っすぐに登る登山を目指しました。

K2 峰登山と同様、約 1 ヶ月をかけて高度順応。準備を終え、北西壁にアタックをかけます。今回はルートが急峻な雪と氷の壁のためできるだけ荷物を軽量化する必要があり、テントも寝袋もおいてきました。休憩だけをしながら三日間、登り続ける予定です。標高 5,600m のベースキャンプを出発し、次第に急峻な氷雪壁に入りました。登っていると不思議なことに自分の頭上の少し離れたあたりにもうひとり、誰かがいるような感覚になっていました。もうひとりの自分、あるいはずっと自分をサポートしてくれているような存在。その彼と時折、話をしながら登るような不思議な感覚でした。順調に高度を上げ、7,000m 位までくると少し傾斜が緩んできます。その辺りから雪がやわらかくて深くもぐる様になってきました。時

間もかかり、体力も消耗します。休憩のみで登り続ける予定でしたが、泊まりながら登るプランに変更せざるを得なくなりました。アタック一日目、7,600m 付近で雪に穴を掘って着の身着のまま夜を過ごす体制を整えました。まずは雪を溶かしてあたたかい飲み物を作ります。お茶ができるとずっと一緒に登っていたような気持ちになっているもうひとりの誰かに「お茶ができたよ！」とカップを差し出します。実際に受け取ってくれるひとがいないのでようやく、その可笑しさに気づきました。

夕暮れが近づいてきました。チョモランマ峰に連なる前衛峰のチャンツェ峰に西陽が当たっています。私がいるチョモランマ峰自体も金色に輝き、空間そのものに何かが満ちているような感じになっていました(写真 4)。

「生きてゆく世界はふもとの方にある。」突然、メッセージが私の内から湧き上がってきました。ふもとは、すべてのいのちがつながってあるその豊かなつながりの世界。そこにこそ、生きてゆくべき世界があると。それは私にとって、啓示といえるような瞬間でした。時を経るほどにそれは私の中で確かなものとなっています。ただ、このときはそのメッセージを胸のなかに収め、さ



写真4 生きてゆく世界はふもとの方にある
チョモランマ峰 7,600m にてチャンツェ峰をみつめて。

らに上部を目指して登ってゆきました。二日目は8,200mで夜を迎え、夜半から山頂へ向けての最後のアタック。暗闇の中を登るうちにいつの間にか急な雪壁に立ったまま寝ています。「あっ、危ない!」と気づいて登ってゆくとまた、寝てしまう。いつの間にか、ずっと一緒に登っている感じがしているもうひとりの誰かが私の世話を焼いてくれ出しました。「休むんならピッケルをしっかり雪にさし込まないと危ないよ。休憩するときは下ではなく上の方を向くんだよ。」

夜が明けるところ、ようやく8,500 m位まで登ってきました。自分の体調を確かめるとバランス感覚が悪くなっています。高度の影響であればもう無理をしない方がよいですが、寒気でもバランス感覚が悪くなります。夜が明けるまで待って体を温めてから判断しようと待機することにしました。ここまで来ると山頂の魔力とでもいえましょうか、惹きつけられてゆきます。成功すれば世界で初めての登山でもありました。そうして太陽のひかりが届くのを待っているうちに、この登山に関わるすべてのことが意識のなかから消えました。その瞬間、「ああ、生きて還ろう。」そう直感し、私は降りる決心をしました。

急な雪壁を延々と後ろ向きで下降し、傾斜が緩くなってくるとお尻で滑りながらやっとのことで平らな雪原に到着。6,000 mのプラトーで待機してくれていたパートナーの優美が迎えにきてくれました。新婚旅行も兼ねたブロードピーク峰縦走から5年、常に彼女がベースキャンプまで同行し、サポートしてくれました。K2 峰やチョモランマ峰では単独登山ゆえ、彼女も同じくふもとでひとりの世界と向き合ってきたことでしょう。その点ではある意味、私たちは同志といえるかもしれません。優美に会い、還ってきたことを実感。想像以上に消耗し、エネルギーを出し尽くした感じでした。生と死、その紙一重の世界にいたのかもしれませんが。同時に、天候は安定していたため、人生でも一度あるか否かの最高のチャンスを逃してしまったのかなという思いもありました。しかし、少し時間をおいて振り返ると 8,500 m 付近を登っていたころ、下から優美が撮ってくれた写真では

真上にオリオンの三ツ星がありました。もちろん、山頂に立てばきれいに完結するのかもしれませんが。しかし、登山とは、登るという行為を通して山や自然、宇宙、さらにいえば自分自身と深くふれあうことだと感じます。登山を超え、生きるという意味で大きな体験となるチョモランマ峰登山でした。真なるものを求め、宇宙に近い世界に向かい続けてきた旅が変化してゆくときがきていました。

II. 一瞬の無限・そこから生まれる共振の世界～

清らかな水と緑に惹かれて

ヒマラヤから離れ、次第に日本の自然に惹かれるようになりました(写真5)。清らかな水の流れ、木々の緑、色とりどりの花々、飛び交い囀る鳥たち…。そのなかに身を置くだけでよこびが溢れてきます。また何より、その場をともにする子どもや仲間の存在を愛おしく、かけがえのないものに感じます。現在、北海道から屋久島の全国各地の自然のなかで子どもたちや親子、学生他様々な方々と自然体験活動を通じた場をともにさせていただいています。

ヒマラヤでも、日本の自然のなかでも、街のなかでも変わらぬものがあるように感じます。下記に私の感じていることを図にさせていただきました。

未来や過去を時間軸で表現し、その全体を意識の領域として囲みました。過去から学び、私たちの先人たちはこの素晴らしい文明を築き、社会を発展させてきました。そして、未来を想定し、デザインする力さえも持つようになっていきます。まさに、人間ならではの部分といえるのでしょうか。

しかし、「いま」という瞬間はこの意識の枠には収まらないものだと感じます。そして、その微細な一瞬の点にしか過ぎない「いま」から左にあるように「しぜん」、「からだ」を含む無限の領域が開かれてゆきます。実はその枠はあっていないようなものですが、そこに「いのち」と書かせていただきました。「いのち」は刻々と「いま、この瞬間」にある。それはまさにブロードピーク峰縦走の時に体感し、私のからだところに深く刻まれた感覚です。この実感に立ちつつ、必要な場面



写真5 清らかな水と緑に惹かれて 九州山地にて

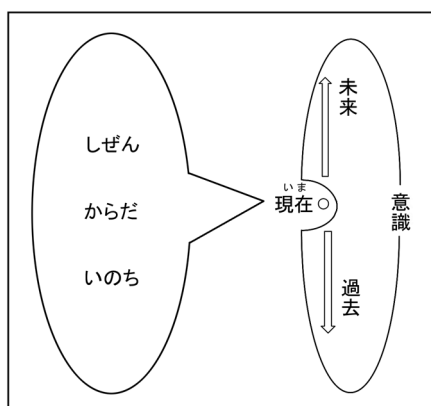


図 意識の領域と、しぜん=からだ=いのち

で意識の世界に適時つながることの大切さ。その意識の世界を「社会」と置き換えてもよいかもしれません。

医療に関わるみなさんは、意識の世界で発見され、積み上げられてきた臨床検査に関する人類の素晴らしい知恵と知識を学び、さらに実践、

研究をされておられることと存じます。

しかし、実際の「いのち」の場面ではそこにひとがいて、その関わりのなかで一瞬、一瞬、場は編まれてゆきます。必要などころで意識の世界とつながりつつも、軸足は「いのちの実相」に置く。そこに生まれる一瞬の「共振」それこそが、ひとりひとりのなかに、そして他者とのつながりのなかに新たな世界を開く鍵になると感じます。

「一瞬の無限・そこから生まれる共振の世界」という題で、第9回日本臨床検査学教育学会学術大会で講演をさせていただきました内容をもとに原稿の形式で書かせていただきました。

写真は絞り込み、音楽ではなく言葉での表現をさせていただきましたが、少しでもみなさまに私の登山体験から、いま、感じ、大切にしている世界をお伝えすることができれば幸いに思います。